

原発建設時代の日本のSFアニメ

秦 剛

二〇一一年三月十一日に東日本大震災が発生し、その直後に襲来した大津波のために、福島第一原子力発電所の深刻な原子炉事故が起きた。一連の災害による計り知れない損失と被害に比べれば、アニメの放送と製作が受けた影響は、実に取るに足らないものと思われるかも知れない。しかし一時期、内容が原発事故を連想させるようなアニメの放送延期や製作中止が相次いだ現象は、日本のサブカルチャーを代表するジャパニメーションと原子力問題との無視できない関係を裏返しの形で示唆したのである。

例えば放送延期になった一例に、テレビ東京で放送中の「ポケットモンスター ベストウイッシュ」シリーズで、二〇一一年三月十七日放送予定の「ロケット団VSプラズマ団！」と題するものがあつた。オフィシャルサイトに公開

された粗筋によると、それは「リゾートデザートからものすごいエネルギー反応が発生していることを知った主人公たちがその真相を明かそうとする話」であつた。延期された理由としては、その内容が「原発事故を思わせる」可能性が高かつたからだ、と、シネマトゥデイ映画ニュースのネット記事には書かれてあつた。

放送延期となつたその一話が後に放送されたのかどうかはわからないが、しかし海外でも絶大の人気を獲得し、日本アニメの代表とも見られる「ポケットモンスター」シリーズ（ゲームを含めた関連市場は全世界で年間3兆円規模と言われる）の作品に、「ものすごいエネルギー反応」の「発生」は、さほど珍しいことではないはずだ。そもそもこのアニメの中心的なキャラクターで、主人公サトシのパー

トナーであるピカチュウは、10万ボルトの電撃を得意技としていたのではないか。

「ポケットモンスター」の第一部の放映が開始された一九九七年のことだが、十二月十六日の第三十八話で、主人公たちが強い光線攻撃を受ける場面を見た多くの子供たちが「光感受性発作」で倒れ、救急車で病院に運ばれるという、世界アニメ史上前代未聞の事件まで起こしたことがある。これは、小学生をも視聴対象としていながら、物語で度々「ものすごいエネルギー」を発生させたことの何よりの証拠である。事件後には、強烈な光線の点滅はだいぶ控えめになったのだから、とはいえ、ポケモンたちの攻撃力の対決で勝負を決めるポケモンの世界から、「ものすごいエネルギー反応」をはずすことは相当難しいだろう。

ところで、この作品に登場した数百種類もあるポケモンの中で、何故ピカチュウだけがもっとも代表的なポケモンになったのか。ピカチュウが代表的なポケモン、ないし代表的な日本アニメのキャラクターのひとつになったことの本当の意味と理由を、よりトータルな視野から問い掛けて、追究してもよいはずである。何故なら、このキャラクターの「ピカチュウ」という名称は、広島の被爆者たちの原子爆弾に対する呼び名「ピカドン」と同一の語幹を持ち、ま

た電気タイプのパケモンであるゆえに原子力発電との近縁関係が見られるからである。原爆と原発のイメージを合成したうえに、それを限りなく可愛らしく形象化するならば、まさにいまの「ピカピカ」と口にするピカチュウになるのだろうと思えてならない。もっとも、そのことについては、日本と海外の視聴者の多くはまったく無自覚だったかもしれない。

ピカチュウという架空の生き物のビジュアルイメージに、戦後日本の原子力に関する文化的な心理、あるいはその無意識の一面が反映されていると見るのが可能なのである。その名前の響きが「ピカドン」に近似し、他方で強烈な電流を際限なく放つ（原発に近似する）技を持つような「ものすごいエネルギー反応」の化け物を、何故日本のアニメがあればどこかで愛すべき対象に造型したのだろうか。

歴史的に見れば、九〇年代の「かわいい」文化を背景に登場したピカチュウは、一九五〇年代の放射能の火焰を噴くゴジラ、一九六〇年代の光線攻撃を技とするウルトラマン、一九七〇年代のスーパーエネルギーで武装されたロボットアニメのヒーローたちと一貫した連続性を見出すことができる。とりわけアニメに限定して考えれば、ピカチュウはテレビアニメ・劇場アニメ・OVAアニメに登場した無

数の戦闘ロボットからの変形もしくは変種として位置づけることができる。そのように見る場合、戦後日本のアニメーションが長く培ってきた感覚にピカチュウが受入れられ、また好まれる理由が非常に判りやすくなる。

「ポケットモンスター」には確かに「野生」のポケモンの存在を仄めかしたり、また登場させたりしていたが、しかし「電気系」のピカチュウを自然界の生き物とするのは相当無理がある。その第一話は、サトシ少年がオーキド博士の研究所からピカチュウを連れ出して旅に出かけることから始まるが、そうした出自からも、ピカチュウとロボットヒーローたちとの近親関係が確かめられよう。ある天才博士が研究所で開発し、製造する。それはすべてのロボットヒーロー誕生話に見られるパターンだからである。

日本のアニメーションが隆盛を極めたジャンルはSFなのであり、その中でもロボットアニメが圧倒的多数を占めている。そもそも、何故あれほど大量のロボットヒーローが、日本のアニメーターによって創られてきたのだろうか。バーチャル空間のロボットに注いだ熱意においては、日本が全世界で唯一無双と言ってよい。そうした「日本の想像力」が如何なる思いに支えられたのかという問いは、ロボットアニメが代表するSFアニメ、さらには日本サブカルチャー

の根本的な課題として提起されてしかるべきである。

端的に言えば、日本のアニメーションにおけるロボットヒーローの大軍団は、「核＝原子力」の存在を抜きにしては成り立たない。動くものに動力が必要であることは、SF世界の最低限のリアル感覚であり、「無限のエネルギー」への夢想と確信こそ、ロボットを創造＝想像するイマジネーションを刺激した原動力なのだ。それをもっとも象徴的に示したのは、日本初の連続テレビアニメ「鉄腕アトム」(一九六三)だが、核を表す英語Atomをその名とし、「超小型原子力エンジン」を搭載して10万馬力の威力を誇る日本のアニメロボット第一号のアトムは、原子力を「無限のエネルギー源」として開発する時代の典型的な産物だと言える。いつも「心正しい」、人間の味方のアトムのイメージが、原作者手塚治虫が意図したか否かはともかく、結果的には原子力の平和利用をアピールし、科学万能の神話を定着させる一翼を担った作品ともなっていた。この問題については、夙に多くの日本の評論家が指摘してきたところである。

しかし、原子力の問題に関わるSFアニメのロボットは、アトムのみに止まるものではない。アトムが確かにロボットアニメのひとつの原点となったのは間違いないが、七〇

年代に入ると、巨大化と武装化が進み、いわゆる戦闘ロボットという、アトムに似ても似つかぬ後継者たちが次々と誕生したのである。それらの戦闘ロボットの源流を考えるには、アトムと同年にブラウン管に現れた、思考能力や感情を持たないロボットの「鉄人28号」（横山光輝原作）に注目する必要がある。この鉄人28号こそ、後に巨大化した戦闘ロボットの元祖である。スーパーロボットの基本的条件が鉄人28号の鉄人によって定義されたと思われているが、実はこのロボットには、戦前の大日本帝国陸軍が秘密裏に開発した「鉄人兵器」であり、完成する直前に連合国の爆撃に遭い、一度歴史の闇に葬られたという前歴がある。戦後に復活して、金田正太郎少年による常に「正しい」目的のための操縦で悪のロボットと戦い、日本を守る用途に使われた。鉄人はもともと最終兵器として造られたので、操縦者によっては神にも悪魔にもなるといふその二面性が、とりわけ強調されている。

「原子力の平和利用」のシンボルである鉄腕アトム。そしてもう片方は戦前に製造された殺人兵器の鉄人。その性質がまるで対照的な両者（ともに原子爆弾との関連性が見出される点は共通する）だが、永井豪原作のマンガを改編したテレビアニメによって、その両者が一体化したような

後継者として、マジンガーZやゲッターロボが生み出された。そうしたロボットヒーローの変貌には、興味深いものがある。

「鉄人28号」では、まだロボットの動力源を特別に問題化していなかった（もともとマンガ原作に、ウラン以上のエネルギーを持つ新元素「バギウム」が登場したこと、鉄人の動力がウラン即ち原子力だと指摘する研究者がいる）のに対して、「マジンガーZ」（一九七二）に登場する、本格的なスーパーロボット第一号のマジンガーZの場合、その材質と動力についてのリアルな設定が特徴的である。後にスーパーロボットの金字塔と評価されたマジンガーZは、無敵の超合金Zで製造され、光子力エネルギーを動力としている。光子力エネルギーとは、富士山の地層に特有の「ジャパニウム」鉱石を超合金Zに精錬する際に抽出されるエネルギーであり、驚異的なパワーを持つ。光子力を手に入れようとするドクターヘルの野望から光子力研究所を守るために、先代所長兜十蔵博士が開発したマジンガーZは、光子力エネルギーを高熱に転換する「プレストファイヤー」という必殺技によって、想像を超える高エネルギーを敵にぶつけるのである。さらにはこの機種によって、操縦者がロボットの頭部に入り込む「乗り込み操縦方式」が

初めて実現されている。

アトムと鉄人28号の混合した後継者としてマジンガーZを見るならば、彼は前者からは原子力という先端技術的な要素を受け継ぎ、後者からは兵器としての性質と、それに付随する鮮明な日本的ナショナリティを受け継いでいる。

マジンガーZの材質と動力源は、富士山の地層に特有の金属「ジャパニウム」であるため、それを開発した光子力研究所は富士山の麓に位置する。光子力研究所は光子力の「平和利用」を目的とするが、ドクターヘルの攻撃の対象とされて、そこは徐々に日本の安全を守る砦と化してしまふ。そこで、マジンガーZの操縦者兜甲児に、日本の平和を守る唯一の希望が託されたのである。

この作品には、富士山の姿が度々画面に映し出され、それを背景に多くの熱戦が繰り広げられた。富士山の麓にある光子力研究所は、科学技術によって立国した日本の象徴であろう。さらには、富士山を唯一の産地とする「ジャパニウム」、またそれによって生み出される光子力エネルギーの日本的性質の強調は、原子力の日本化を強く暗示しているものであり、そこからは、エネルギー開発の領域における日本の技術の先進性に対する自負とともに、核兵器をものにしたい思いさえ読み取れる。

「マジンガーZ」に引き続き、同じく永井豪原作の「ゲッターロボ」(一九七四)では、ゲッター線という宇宙線を動力源と武器にするゲッターロボが登場する。もともと平和的な宇宙開発用に製造されたものだが、昔ゲッター線によって滅され、地底に追いやられた恐竜帝国が、ゲッター線の開発を続ける早乙女研究所に襲来するのを予知した早乙女博士が、恐竜撃退のためにそれを戦闘用に改造したという。「マジンガーZ」の「光子力」に比べて、「ゲッターロボ」における「ゲッター線」は、限りなく原子力に酷似し、またそれを強く連想させるように設定されている。それによれば、ゲッターロボの駆動には「ゲッター炉心」と呼ばれる反応システムを用いている。この炉心は原子炉と同様に、臨界を越えるとメルトダウンを起こす。また「ゲッター線汚染」という放射能汚染を引き起こす場合もあるという。そのほか、ゲッターロボが実現したロボット機能の革命的な進化のひとつに、合体変化という斬新なアイデアが取り入れられた点がある。三人の高校生が操縦する三つの機体の組み合わせで、陸海空の三つのタイプの形態にチェンジできるゲッターロボ、それは言うまでもなく、実際の軍隊編成に似せた発想だったのである。

アトム、鉄人、マジンガーZ、そしてゲッターロボ。ロ

ロボットアニメの礎を作ったこれらの作品では、科学の力で手に入れた強力なパワーを、例外なく「平和目的」に使用することが強調されている。つまり、これらのロボットヒーローたちは、「原子力エネルギーの平和利用」の名目で建設された日本の原発と、まったく同様な論理で生み出された産物なのだ。しかし一方では、スーパーエネルギーを駆動力と武器の両方に使うマシンガンZやゲッターロボの存在は、核分裂の「平和利用」とそれによる「武装化」との切り離し難い関係を何よりも明確に物語っている。

非武装のアトム（といっても、一九六三年のアニメ第一作ではお尻にマシンガンが付けられたが）から、七〇年代の完全武装化されたマシンガンZやゲッターロボへ。このように、「心正しい」「科学の子」だったアトムが切り開いたアニメジャンルは、武装を常識とする戦闘用のロボットヒーローへの素早い進化によって流れを変え、「合身戦隊メカンダーロボ」（一九七七）、「機動戦士ガンダム」（一九七九）、「宇宙戦士バルディオス」（一九八〇）、「超時空要塞マクロス」（一九八二）、「機甲戦記ドラグナ」（一九八七）、「新世紀エヴァンゲリオン」（一九九五）などを通じて無数の鋼鉄の巨人を世に送り出したのである。よく海外で言われてきた日本アニメの暴力性は、「国権の発動たる戦争」

ないし「武力の行使」やそれによる威嚇まで放棄したはずの国が、ロボットを担い手とする戦闘アニメを氾濫させ、その中で究極兵器を濫用してきた事実を指しているわけだ。

日本のアニメーションにおける巨大ロボットの誕生と進化が、原子力絡みの軍事技術の開発と利用への夢想を土壌とすることは、紛れもない事実である。特に七〇年代のロボットヒーローたちは、日本的テクノロジーの賜物として登場するものが多い。これらのアニメ作品は、「日本」を強調しながらも、日本の厳守すべき非核三原則（「持たず、作らず、持ちこませず」）を完全に無視しており、イマジネーションの世界でそれを無効化したに等しい実質を持っている。

ところで、「マシンガンZ」、「ゲッターロボ」などが、「光子力」や「ゲッター線」の名を借りて核の威力を表現したとしても、その仕方は極めて勝手に安易なもので、結局核に関する一面的な認識しか示していなかった。中でもとりわけ大きな盲点は、放射能による環境破壊の側面をまったくといていいほど取り上げていないことである。だからこそ、マシンガンZは富士山の麓の戦場で何も顧みずに「光子力」を発射できるのである。

「ゲッターロボ」と同年に完成した「宇宙戦艦ヤマト」

(一九七四)は、核兵器による放射能汚染を問題化した大作である。この作品は若者たちを熱狂させ、七〇年代のアニメブームを巻き起こしたばかりでなく、人類の危機と滅亡を描く終末もののアニメの先頭を切ったのである。地球が正体不明の異星人による遊星爆弾(原子爆弾の変形)の無差別攻撃を受けて、地上に溢れた放射能汚染で生物が死滅し、人類の絶滅まであと一年と迫る。放射能に汚染された地球を救うために、宇宙戦艦ヤマトが「放射能除去装置・コスモクリーナー」を求めて宇宙のかなたのイスガンダルという星へと旅立つ。第二次世界大戦で沈没した、世界一の巨艦だった戦艦大和を復活させ、危機に陥った地球を防御する使命を背負わせる設定が示すように、その物語には戦後日本の屈折したナショナリズム幻想が織り込まれている。統編を含めた当シリーズには「放射能除去装置」、「宇宙放射病」、「重核子爆弾」、「太陽内部の核融合」など様々な放射能関連の設定が登場している。振り返って見れば、初回の放送から画面に繰り返し出された赤茶けた地球(ユーレイ・ガガーリンの有名な言葉「地球は青かった」で語られた地球のイメージのアンチテーゼとして見ることが出来る)は、七〇年代以後の日本のSFアニメが表現した(世界)の原風景になったと言える。後に「北斗の拳」

(一九八四)や大友克洋の劇場アニメ「AKIRA」(一九八八)などが、廃墟化した世界で繰り返られる物語として、その風景を受け継いでいる。

核攻撃によって放射能に汚染された地球の環境問題を取り上げた「宇宙戦艦ヤマト」は、一九七〇年代の冷戦時代にあつて、世界の厳しい核状況に由来する深刻な危機意識を反映している。しかし一方では、放射能汚染の脅威を外部よりもたらされたもの、しかも謎の敵からの理由なき攻撃によるものとして描いた点に、著しい限界性があつた。

そして特に問題なのは、当作品は地球全体の環境を問題化しているながら、日本人だけが人類と地球を代表する(異星人が白人種の顔をする)ような自閉的な物語の枠組みに嵌め込まれているのであり、その平和主義の外装が包んだのは、実のところやはり戦前の戦艦大和が代表する日本魂という保守的なコアだった。

「マジンガーZ」や「ゲッターロボ」が示す技術立国としての日本にせよ、地球全体の平和と安全の希望が託された「宇宙戦艦ヤマト」の日本にせよ、いずれも「日本」地球の図式が繰り返されるなかで、兜甲児や古代進などのような民間人の少年が戦士として生長していく。ところが、もし同年上映の「ゲッターロボ」と「宇宙戦艦ヤマト」の

二作を並べるならば、そこには極めて不思議な対比が浮かび上がってくる。前者は、放射能を恐れる恐竜を地球人（日本人）が放射能で撃退する話であるのに対して、後者は、異星人による放射能攻撃に脅かされた地球人（日本人）が放射能除去装置を求める物語になっている。物語の視点が完全に逆転した、一見矛盾するような両作品の存在は、「核Ⅱ原子力」を持つ側の力と持たない側の恐怖を、合わせ鏡のように繰り返すことで、結局のところ、「核Ⅱ原子力」肯定論につながる論理を共通して提供していたとも言えよう。これが、福島第一原子力発電所の六組の原子炉が次々に稼動し始めた七〇年代日本の人気アニメにおける、「核Ⅱ原子力」表現の実態だった。そして、これらのロボットアニメや終末アニメによって、アニメに熱狂する世代が作り出されたのである。また、後にアニメファンたちに決定的な影響を与えた「機動戦士ガンダム」を経て、評論家宮台真司が指摘したところの、男の子を中心にした「核戦後の共同性」を求める意識の形成に至ったのである。

七〇年代の日本SFアニメを振り返ってみると、今から見てももともと健全な価値観と原子力への認識を示した屈指の作品は、やはり宮崎駿監督のテレビアニメ「未来少年コナン」にほかならない。その作品では、核兵器と原子力

エネルギー（作中に「太陽エネルギー」としている）の表裏一体の関係を明確に提示した上で、その両者を同時に批判的に取り上げている。最終戦争の勃発で世界の半分が消滅し、地軸が曲がり、大陸が沈没した後の世界でも、世界支配を狙う権力者が太陽エネルギーを復活させようとしている。太陽エネルギーの開発者の一人で、太陽エネルギーが生み出した超磁力兵器が世界を滅したことに責任を感じたラオ博士は、太陽エネルギーを「誰の手にも余る怪物」と警告し、それをコントロールするために「21世紀の科学の粋を集めて建設された」太陽塔（一九七〇年の大阪万国博覧会のシンボル「太陽の塔」に近い名称だが）が「愚かな幻」にすぎず、間もなく海に沈んでいくのを予見する。

そして予見通り、太陽エネルギーを一時的に復活させた「太陽塔」は激しい地殻変動にともなう大地震によって瓦解してしまう。この作品の先見性は、3・11後の現在、日本の原子力表現の文化史において、再評価してよいはずである。宮崎駿は八〇年代以後の「風の谷のナウシカ」、「天空の城ラピュタ」、「となりのトトロ」など、現代文明への反省と批判に基づく新しいエコロジー思想を表現した劇場アニメにより、アニメ作家兼思想家としての独自の道を歩んでいくが、「未来少年コナン」はその出発点のひとつ

つであったと言えよう。

福島第一をはじめとする日本の原発の多くが稼動し始めた一九七〇年代、それは同時に日本のアニメーションの最初の黄金期だったが、両者の密接な対応関係の指摘を主旨とする本文は、以上をもつて擱筆してよいところだが、最後に宮崎駿の短編作品「On Your Mark」(1995)について触れてみたい。何故なら、この作品は原発事故が起きた後の世界を描いた、稀な日本アニメだったからである。

音楽プロモーション用の短編として制作された「On Your Mark」では、放射能汚染で地上の世界に居住できなくなった人間が、地下の人工都市に暮らす時代のことを描いている。国家権力による徹底的な弾圧で全滅した宗教団体から、監禁された、翼の生えた少女が発見された。外部世界から捕らえられたと思われるこの少女を、国家機関が実験台に載せて、放射能が溢れる世界に生きるすべを研究しようとしている。そこへ二人の若い警官が登場し、実験台から少女を救出する。そして命懸けで人工都市から脱出し、少女を青空に返す。このわずか6分49秒の映像は、複雑なストーリーが設定され、多様な解説の可能性のある物語だが、生きる基盤としての大地を失った絶望的な状況下でも、精神的自由を追い求め、空を飛ばたく少女におのれの夢を託すという、核時代の寓話として見る事ができる。

しかも、そこに倫理性を失った科学主義と保守化する国家体制への批判が織り込まれている。

この作品が描く、巨大な原発の建造物が廃棄された地上の世界では、放射能注意マーク(放射性標識)と「極度危険」「不保障生命」などの警告文字が目立つ。ところが、そこまでは当然だとしても、何故か人間が住む地下の人工都市でも、警察署のヘリコプターやトラック、そして実験室や高速道路などの至るところに放射性標識を見かける。それは一体、何故なのか。うかつな筆者は、その意味するところを福島原発事故が起きた後にやっと理解したのである。つまり、宮崎駿が描いたその未来社会では、地下都市に住む人間は依然として核エネルギーを頼りに生きていたのである。放射能汚染で地上の世界を失っても、なお原子力に依存せざるをえない人間の姿。それを悟った途端に、筆者は思わず身震いせずにはいらなかった。

宮崎駿が率いるスタジオジブリは、原発の立場で「原発ぬきの電気」で映画をつくりたい」と表明したが、「原発の電気」で作ったものと思えない日本アニメが、かつての問題作を如何に反省するのか、また、核時代の日本のサブカルチャーの代表として、現在の状況に対応するような作品を如何に創っていくのかを、見守っていききたい。

(北京外国語大学 北京日本学研究センター)